

気象庁による火山活動度レベルの公表

Announcement of Volcanic Activity Level by Japan Meteorological Agency

山里 平[1]; 大賀 昌一[2]; 大工 豊[3]; 舟崎 淳[4]; 松島 正哉[2]; 内藤 宏人[1]; 菅野 智之[1]

Hitoshi Yamasato[1]; Shoichi Oga[2]; yutaka daiku[3]; Jun Funasaki[4]; Masaya Matusima[2]; Hirohito Naito[1]; Tomoyuki Kanno[1]

[1] 気象庁火山課; [2] 福岡地震火山課; [3] 鹿児島地方気象台; [4] 気象庁地震火山部火山課

[1] Volcanological Division, JMA; [2] Fukuoka District Meteorological Observatory; [3] Kagoshima Local Meteorological Observatory; [4] Volcanological Division, JMA

気象庁は、全国の活火山の活動を火山監視・情報センター（札幌、仙台、東京、福岡）において24時間常時監視し、火山活動の状況に応じて火山情報（緊急火山情報、臨時火山情報、火山観測情報）の発表を行っている。これらの火山情報に関しては、「文章表現であるためわかりにくい」等、防災機関等が利用する上でより一層わかりやすく改善するよう要望されてきており、火山噴火予知連絡会の提言を受け、火山活動の状況が容易に理解できるよう、火山活動度レベルを数値で示す手法について検討を行ってきた。一定の部内試行等の検討を経て、火山活動度レベルを、火山活動の程度及び防災対応の必要性により0～5の6段階に区分けすることにし、過去の噴火活動等に関して詳細な解析が行われている、浅間山、伊豆大島、阿蘇山、雲仙岳、桜島の5火山（以下「5火山」という。）において、2003年11月4日から公表を開始した。

火山活動度レベルの区分けは、次のような考え方で行った。

レベル0：噴気活動や火山性地震等も含め長期間火山の活動の兆候がない状態。

レベル1：静穏な火山活動。噴気活動や火山性地震等はあるが、噴火の兆候が見られない状態。

レベル2：やや活発な火山活動。火山性異常が見られ、火山活動の状態を見守っていく必要がある状態。気象庁は、火山観測情報を必要に応じて発表し、火山活動の状況を伝える。

レベル3：小～中規模噴火活動等。火山活動に十分注意する必要がある状態。レベル3に上がった段階で、気象庁は原則臨時火山情報を発表し、注意喚起を行う。

レベル4：中～大規模噴火活動等。火口から離れた地域にも影響の可能性があり、警戒が必要。レベル4に上がった段階で、気象庁は原則緊急火山情報を発表し、警戒を呼びかける。

レベル5：極めて大規模な噴火活動等。広域で警戒が必要。

火山活動度レベルは、地元自治体等が登山規制等の防災対応を執る上で参考とできることを目的としている。よって、噴火様式や社会的要因の違いに伴い、防災対応の方法は火山によって異なることから、火山活動度レベルは各火山毎に定義したものとなっており、同じ火山活動度レベルでも発生しうる噴火の規模等は火山毎に異なっている。

また、防災対応に資するという目的のため、レベルの頻繁な上げ下げは避ける必要があり、当該レベルに対応する現象（例えば火山性地震の群発等）が終息した後も一定期間そのレベルを保持することになっている。その期間は過去のデータによるシミュレーション結果等を参考にし、レベル2以上については多くの場合2週間から1ヶ月程度としている。

火山活動度レベルは、気象庁ホームページに常時掲載している。また、火山情報には必ず掲載されるとともに、火山活動度レベルが変更される場合は火山情報によって周知される。

5火山以外の火山についても、個々の火山活動や防災対応の特徴に応じた火山活動度レベルの導入を、順次進めていく予定である。

本ポスターにおいては、5火山の火山活動度レベルの考え方及び判定基準等について紹介する。